——ヨハンナ・スピリ原作——

ハイディ（第十四回）

津田芳雄譯

ロッテンマイアさんは階段の上まで見送りに出て來たが、目ざとく籠の上の赤い包みを見付けると、地べたへ投げ棄てゝしまつた。

「何です、アデライデ、汚らしい。そんなものを持つてこの家を出てもらつては困りますよ」

ハイディは怖ろしくてこてもそれを拾ひ上げる勇氣はなく、世にも大切なものを奪はれたやうに、訴へるやうなまなざしで、この家の主人を見上げた。

「よし〳〵、持つておいで。仔猫でも龜でも、好きなものは何でも持つて行つていゝんだよ。ロッテンマイアさん、われ〳〵は干渉する必要はありませんよ」

ゼーゼマン氏はきつぱりと云つた。

ハイディはうれしさうに、素早く包みを拾ひ上げて、馬車の入口に立つてゐた。ゼーゼマン氏はその手を握りしめて、わたしとクララのことは忘れないでくれ、道々氣をつけて行くやうに、と云つた。ハイディは何度もお禮を云ひ、お醫者樣にもくれ〴〵もよろしくと賴んだ。昨夜お醫者樣が、明日は何もかもよくなりますよ、と云つた言葉を覺えてゐて、これはきつとお醫者樣が計らつて下さつたのだと、ハイディは利口にも悟つたからである。ゼーゼマン氏はハイディを抱いて馬車に乘せてやり、それから籠とお辨當が積み込まれ、一等おしまひにセバスチャンが乘り込んだ。もう一度ゼーゼマン氏が

「ごきげんよう！」

と呼びかけ、馬車は走り出した。

やがてハイディは汽車に乘つた。おばあさんへ

のお土産のパンの這入つた籠をしつかりと膝の上にかゝえて、片時も手離さず、時々中をのぞき込んで見たりしながら、何時間もの長い間、ぢつとおとなしく坐つてゐた。今になつてやつと、自分がほんたうに、おざいさんやベーテルやおばあさんのゐるお山へ歸つて行くのだといふことがわかつて來た。するといろんなものが次から次へと目の前に浮んで來て、みんな今頃はどうなつてゐるかしらと考へて行くうち、急に心配になつて來て、

「セバスチャン、お山のおばあさんは、大丈夫だわねえ。死んだりなんかしてやしないわねえ」

と訊いて見るのだつた。

「大丈夫ですとも、きつとまだぴん〳〵してゐますよ」

セバスチャンは慰めた。

ハイディは又もの思ひに耽り、いろ〳〵の場面を思ひ浮べて見た。一等たのしみの場面は、おばあさんの前にずらりと卷パンを竝べて見せるところなので、又しても籠の中をのぞいて見るのだつた。長い間默り込んでゐた後で、ハイディは又云つて見た。

「ほんたうに、おばあさんが生きてゐることさへわかつたら、どんなにかいゝのだけれど——」

「生きてゐますともさ。死ぬわけがないぢやありませんか」

セバスチャンは半分眠りこけながら云つた。

そのうちに、ハイディも睡くなつて來た。昨夜の大さわぎの上今朝は又早くから起されたので、ぐつすりと眠り込んで、セバスチャンに

「お起きなさい、お起きなさい、バーゼルですよ」

とゆすり起されて、やつと目を覺ました。

その次ぎの日も、又長いこと汽車に乘つた。ハイディは又籠を膝にのせ、この日は一度も口さへ開かなかつた。一歩一歩おうちに近付いて行くのかと思ふと、うれしくて口もきけないのだつた。突然、思つたよりもずつと早く、

「マイエンフェルト！」

と驛夫が呼んだ。ハイディもセバスチャンもびつくりして飛び上り、あわてゝハイディの旅行かばんを降ろして、プラットフォームに降り立つた。セバスチャンは、二人を尻目に悠々と煙をはいてなほも進んで行く汽車を、うらめしさうに見送つた。今までは乘り物で樂な旅であつたが、これか

ら先きは、こんな田舍の危げな山道を、てく〳〵歩いて登らねばならないかと思ふと、うんざりしてしまつたのである。それで、デルフリへ行く一等らくな道を誰かに訊ねやうと、あたりを見廻した。すると、停車場のすぐ外で、汚い小さな荷馬車に、今汽車から降ろした重い袋を積み込んでゐる頑丈な男がゐたので、セバスチャンは、デルフリに行くにはどの道が一番危くないか、途中に崖から轉がり落ちたりするやうな怖ろしい所はないか、旅行かばんはどうして運べばよいか、などとくどく〳〵と訊ねた。その男は、旅行かばんをぢつと見て、目分量で重さを計つて見たりなどしてゐたが、やがて、どうせ自分はこれからデルフリまで行くのだから、子供と鞄をこの車に乘せて行つてあげやう、それから先きは、又誰かを見付けて送つて行つてもらへばいゝだらうと云つた。

「わたし、デルフリからなら、よく道を知つてゐるから、ひとりで行けてよ」

この時まで一生懸命大人たちの話を聞いてゐたハイディが口をはさんだ。セバスチャンは山道を登らずにすむので、大助かりとばかり悅んだ。ハイディをわきに呼び、幾重にもしつかりと包んだ紙包みと、おぢいさんへの手紙とを渡しながら云つた。

「いゝですか、この包みは旦那樣がお孃さんに下さつた大事なものですから、失くさないやうに、籠の底のパンの下へしつかりとしまつておくのですぜ。もし失くしたら、旦那樣は大層お怒りになつて、もう前みたいに可愛がつて下さらなくなりますよ。わかりましたね」

「大丈夫よ、きつと失くさないから」

ハイディは受け合つて、すぐに大切に籠の底へしまつた。鞄はその間にもう積み込まれてゐた。セバスチャンはハイディと籠を馬車に乘せ、お別れの握手をした。それから、馭者が傍に立つてゐたので、用心して目顏で、籠にくれぐれも氣を付けるやうにと合圖した。やがて馭者も乘り込み、車は山の方へと動き出した。セバスチャンは自分で送り屆けなかつたことに氣が咎めながらも、一日足も疲れさせずにすんだことを悅びながら、停車場で歸りの汽車を待つた。

この荷馬車の馭者といふのは、デルフリの水車小屋の粉挽きで、麥粉の袋を持つて歸るところだつた。ハイディには會つたことはないけれど、村

ぢうの人の話で、噂は聞いてゐたし、ハイディの兩親とは知り合ひだつたので、一目見た時から、これがあの噂の子供だなと思つた。どうして歸つて來たのかと不思議に思ひ、道々話をはじめた。

「お前さんは、アルムをぢさんのところにゐた子供だらう？」

「ええ」

「向ふではよくしてくれなかつたのかい？、それでこんなに早く歸つて來たのかい？」

「さうぢやなくつてよ。フランクフルトでは、とても大事にして下さつたわ」

「そんなら、何故歸つて來たんだ、？」

「ゼーゼマン樣が、お暇を下さつたからよ。それでないと、歸つちやいけないのよ」

「おいてくれるつてのに、なぜゐないんだい？家にゐるより、よつぽど贅澤が出來るだらうに」

「だつて、おぢいさんとお山にゐるのが、わたし、何處よりも一等すきなんだもの」

「まあ、歸つて見れば、考へも變るだらうよ」

粉挽きはつぶやいた。それから、

「おかしな子供だなあ。何もかも承知で、あの山へ歸つて來るんだからなあ」

とひとりごとを云つた。

やがて粉挽きは口笛を吹きはじめ、話しかけて來なくなつたので、ハイディは又あたりの景色に眺め入つた。するとなつかしさで身うちが震へて來た。道ばたの木は一本一本みんなお馴染の木だし、頭の上には高いけはしい崖が、古いお友達のやうに、ハイディを見おろしてゐる。ハイディはその一つ一つにうなづいて挨拶をかへした。刻一刻とうれしさとなつかしさが募つて來て、果ては馬車から飛び降りて、山のてつぺんまで力の限り駈け登りたいやうな衝動にかられた。けれども逸る心を一生懸命抑へて、おとなしく身動きもしないで、ぢつとしてゐた。

デルフリに着いたのは、五時だつた。粉挽きが子供と大きな鞄を積んでゐるので、物見高い女子供がぞろ〳〵と車のまはりにたかつて來た。ハイディは粉挽きに抱き降ろしてもらふと、

「有難う。鞄はおぢいさんに取りに寄越してもらひますから」

と急いでお禮を云つて走つて行かうとした。

みんなは早速つかまへて、口々にいろ〳〵訊ねやうとしたが、ハイディがあんまり困つたやうな

顔をするので、强ひて聞き出すことも出來なかつた。

「すつかり怖氣ついてゐるぢやないか、無理もないことだがねえ」

なぜと、互ひにうなづき合ひながら、又もやアルムをぢさんの噂話をはじめた。去年は人に會つても口一つ利かず、會ふほどの者を殺しも兼ねまじき顏をして睨み付けたこと、可哀さうに、あの子だつて、ほかに行くところさへあれば、なにも好んで虎穴に戻つて來るやうなこともしないだらうに、なぜゝ云ひ合つてゐると、粉挽きがそれを遮つて口をはさんだ。マイエンフェルトまで親切な旦那樣があの子について來てゐて、氣前よく馬車賃と祝儀を自分にくれたこと、向ふではあの子は勿體ないくらゐ大事にしてもらつてゐたのだけれど、あの子がどうしてもおぢいさんのところに歸りたくて、振り切つて歸つて來たのださいふことを皆に話した。これは全く思ひがけない話なので、またたく間に村ぢうに傳はり、その晩ハイディのこの驚くべき噂をしない家は、村ぢう一軒もなかつた。

ハイディはデルフリからのけはしい登り道を、ごん〳〵大急ぎで登つて行つた。けれども、籠は重いし、頂上に近づくにつれて路はます〳〵けはしくなつて來るので、時々立ち止まつて息をつかねばならなかつた。始終一つの考へがハイディの頭にこびり付いてゐた。——おばあさんはあのいつもの隅つこで、絲車をまはしてゐるかしら、ほんたうにまだ、生きてゐるかしら?。

たうとう山のくぼみにあるおばあさんの小屋が見え出した。ハイディは胸がどき〳〵して、一散に駈け出した。胸はます〳〵高鳴る。——たうとう家の前に來た。ハイディは手が震へて戸が開けられなかつた。やつと家の中へ這入つたけれど、息がはづんで聲が出なかつた。

すると隅つこで聲がした。

「ああ神樣、ハイディはいつも、丁度あんな風に駈け込んで來てくれたものでございます。どうぞもう一度だけ、あの子に會はせて下さいませ。——おや、そこにゐなさるのは、どなただね?」

「わたしよ、わたしよ、おばあさん!」

ハイディは飛んで行つておばあさんにしがみ付き、感きはまつて一言も云へなかつた。おばあさんも、あまりの思ひがけない喜びに、はじめは聲

も出なかつたが、やがて手さぐりにハイディの頭を撫で、捲毛にさはつて見ながら、

「おお、おお、これはあの子の髪の毛だ、あの子の聲だ。神樣、ほんたうに有難うございました。——だけどお前さんはほんたうにハイディちやんなんだらうね。夢ぢやないんだらうね。ほんたうに歸つて來ておくれだつたのだね？」

と、嬉し涙にかきくれた。

「ええ、ほんたうよ、おばあさん。ほんたうに歸つて來たのだから、もう泣かないでね。もうどこへも行きやしないわ。わたし、これから毎日おばあさんとこへ來てよ。ああ、それからね、おばあさんはしばらくは堅いパンを食べなくてもいゝのよ。ほら、これ見て頂戴！」

ハイディは籠の中から卷パンを出して十二本をすつかりおばあさんの膝の上に積み上げた。

「まあ、まあ、なんてやさしい子なんだらうね」

おばあさんはうづ高い卷パンにさわりながら叫んだ。

「でも、それよりも何よりも、お前さんが歸つて來てくれたのが、わたしには一番有難いのだよ。さあ、何か云つておくれ。お前さんの聲を聞かせておくれ」

おばあさんは又してもハイディの髪の毛や、あたゝかい頰つぺたに觸つて見るのだつた。

そこでハイディは、自分のゐない間にあばあさんが死んでしまつて、白パンがあげられなくなつたらどうしやう、そんなことになれば、もう二度と會へないのだと思ふと、心配で心配でたまらなかつた話をした。

ペーテルのお母さんのブリギッタが歸つて來て、しばらくぼかんとして突つ立つてゐた。

「まあ、ハイディちやんぢやないか！、だけど、一體そんなことつて、あるのかしら」

ハイディは立ち上つた。すると、ブリギッタは口を極めてハイディの着物や樣子をほめちぎつた。前にまはり、後にまはつて叫びつゞけた。

「おばあさん、ほんとに一目見せてあげられたらねえ！、すつかりきれいになつて、きれいな着物を着て、まるで見違へるやうだよ。——この羽飾りのついた帽子も、お前さんのだらう？、ちよつと、被つて見せておくれよ」

「いや。わたしかぶらないわ」

ハイディはきつぱりと答へた。

「をばさん、よかつたら上げるわ。わたし要らないの、わたし、自分のがちやんとこつてあるのよ」

さう云ひながら、ハイディは赤い包みを解いて、自分の古い麥藁帽子を取り出した。長い道中で一層くしや〳〵になつてゐたが、ハイディは一向平氣だつた。ハイディはおぢいさんがデーテ叔母さんに、そんなへら〳〵した羽飾りのついた帽子なんぞをかぶつて、二度と目の前に現はれるなと怒鳴り付けたことを、まだ覺えてゐたのである。おぢいさんの家へ歸ることは、一刻もハイディの頭を去らなかつたので、その時のことを思つて、ハイディはあんなにも苦心慘憺して、この古い帽子を護りとほして來たのである。ブリギッタは、人にやつてしまふなんて、そんな馬鹿なことを考へてはいけない。自分はそんな立派な帽子を貰はうなどは思はないが、もしハイディが要らないのなら、デルフリの村の校長先生のお孃さんに賣れば、高く賣れるだらうと云つた。

だがハイディはあくまでをばさんに上げやうと思ひ、こつそりおばあさんの椅子の後にかくしておいた。それから美しい着物をみんなぬいで、腕をむき出しのまゝ、赤い肩掛をかけた。さうしておばあさんの手をしつかりと握つて云つた。

「わたし、もうおぢいさんのところへ歸らなきやならないわ。でも、あした又來てよ。さようなら、おばあさん」

「それぢや、又來ておくれよ。あしたきつと來ておくれよ」

おばあさんは名殘惜しさうにハイディの手を握りしめて頼んだ。

「どうしてハイディちやんは、あのきれいな着物をぬいだの？」

ブリギッタがたづねた。

「だつて、もこの服裝で歸らないと、おぢいさんが、わたしだつてことがわからないでせう？」をばさんだつて、はじめわからなかつたんだもの」

ブリギッタは戸口まで送つて來て、意味深長な聲で云つた。

「あの着物を着て歸つたつてかまはないんだけどねえ。おぢいさんは大丈夫見違へたりしやしないよ。だけど氣をお付けよ。なんだかペーテルの話ぢや、この頃おぢいさんはこても機嫌がわるくつて、一言も口をきかないさうだからね」

ハイディは別れを告げ、籠をかゝえて又どん〳〵

山路を登つて行つた。まはりの險しい線の斜面には、夕陽が眞赤に照り映えて、やがてぎら〳〵光つた大雪原がはるか上の方に見え出した。登れば登るだけ、後に高い峯があらはれて來るのが面白くて、ハイディは何度も足を止めてふり返つて見た。突然、暖い光りがハイディの足もとの草の上に落ちた。ハイディがびつくりして後を向くと、高い二つの峯が、まるで二つの大きな焰のやうに空中に突き出し、雪原が一面に眞赤に染まつて、空には茜色の雲がたゞよつてゐた。——こんなすばらしい景色は、ハイディはもう長いこと忘れてゐた。いくつも見たゞの夢にも、こんな美しい景色は現はれなかつた。——山のてつぺんの草は金いろに變り、岩はすつかり火と燃えて、谷一面は金いろの靄につゝまれた。ハイディはこのすばらしい景色を眺めてゐるうちに、うれしさと感謝の涙がひとりでに流れ出た。知らぬ間に手を合はせて天を見上げながら、神樣がなにもかも元どほりに、それどころか、思つてゐたよりもずつと〳〵美しくしておいて下さつたこと、そしてその美しいお山へ、又歸らせて下さつたことを、心から神樣にお禮申し上げた。あんまりうれしくつて有難くつて、どう云つてお祈りしてよいかわからないくらゐだつた。夕やけの光りがすつかり薄れてしまふまで、ハイディはどうしてもそこを立ち去ることが出來なかつた。

それから今度は大急ぎで駈け出したので、間もなく小屋の屋根の上にそびえてゐる樅の木の先きがちよつぴり見え出し、次ぎに屋根、それから小屋全體、そしてたうとう、せんの通りに腰かけて、煙草をふかしてゐるおぢいさんの姿が見え、樅の木が風に枝を鳴らしてゐるのまで、はつきりと見えて來た。ハイディは夢中で駈け出し、おぢいさんが氣付くより早く、いきなり駈けよつて行つて、籠を投げ出し、おぢいさんの首にしがみ付きながら、たゞもううれしくつて、

「おぢいさん！　おぢいさん！　おぢいさん」

といふばかりであつた。

おぢいさんも一言も口が利けなかつた。何年ぶりかで、おぢいさんの眼には涙が光つた。しばらくしてハイディの卷き付けてゐる手をほどいて膝の上に抱き上げ、ぢつと顏を見つめてから、

「ハイディ、それで、どうして歸つて來たのぢや。あんまり都會のお孃さんらしくもなつて居ら

んやうぢやが。歸されたのかね」
「さうぢやないわ、おぢいさん」
ハイディは一生懸命に云つた。
「そんなこと思つちや大間違ひよ。みんな、クララもおばあさまもゼーゼマン樣も、それはそれはよくして下さつたのよ。だけどわたし、どうしてもおぢいさんのところに歸りたくつて、がまん出來なかつたの。死んでしまふかと思つたわ。息がつまりさうな氣がしたのですもの。でもわたし、一度だつて、歸りたいなんて云はなかつたわ。そんなこと云ふのは、恩知らずなんですものね。そしたら急に昨日の朝とても早く、ゼーゼマン樣が、わたしに歸つてもいゝつて仰しやつたの。——でも、それはみんなきつと、お醫者樣がよくして下さつたのだと思ふわ。——ああ、お手紙にみんな書いてあるかも知れないわ」
ハイディはおぢいさんの膝から飛び降りて、お金の包みとお手紙を取つて來て、おぢいさんに渡した。
「これはお前のぢや」
おぢいさんはさう云つて、お金の包みをそばの腰掛けの上に置いた。そして手紙を開いて、讀み終ると、何も云はずにポケットにしまつた。
「どうぢや、ハイディ、またわしと一緒に山羊の乳が飲んで暮らせるかね」
おぢいさんはハイディの手を引いて小屋の中へ連れて這入りながら云つた。
「ああ、あの金をとつておいで。あれだけあれば、こゝ二三年間ぐらゐは、寢臺でも蒲團でも、着物でも、好きなものが買へるよ」
「そんなもの、わたし要らないわ。わたしにはせんの寢臺があるし、着物だつて、クララがごつさり入れておいて下さつたから、ちつとも要らないのよ」
「とにかく取つて來て戸棚にしまつてお置き。又いつかきつと要る時があるから」
ハイディは素直に云はれた通りにして、嬉しさうにおぢいさんの後から家の中へ跳んで這入つた。なにもかもが元の通りなのがうれしくて、あつちの隅からこつちの隅へと駈けまはつた。それから梯子を上つて見て、困つたやうな、びつくりした聲で叫んだ。
「あら、おぢいさん、わたしの寢臺がなくなつちやつたわ」

（三五頁へ）

ふたゝ、二親をよばゝりて悦べども、節句前の工面あしき所へ思ひがけない處へ、有德者の所持すべき結構なる人形をくれられければ、嬉しいやら難儀なやら、ほんの小家に人形の過た當惑、此人形代を半分生で被下たらば、けふ節季の能勝手にならふ物をゝ、思ふ夫婦がそぶりを早さとりしは、布袋親父の老功にて見て取、いか樣是は子供不便に思ふた斗誠に不便ゝ思ふときは、人形よりは内の勝手ゝなる事をしてやるが近道ゝ、氣が付きしゆへ、まゝよ一向はづすつゐでゝふゝした拍子にのり、又懐中より金拾兩取出してゝらされしが、是にて誠に人形の忝い一禮を夫婦がさかさまに成ていへば、彼五つになる坊主は家内をかけ廻りて、義經じや辨慶じやゝいふて悦びいさむ所は、昔名人の俳諧師が歌仙の付合に酒を飲で、人に物やる面白さゝいはれたごとく、此布袋親父の物數奇もおろかな樣なれゞ、有德なまゝに息をたかぶり、妾めかけに我身をいたわり、遊所ぐるひに若い時より不養生する人から見ては、貧者の助にもなる風流な樂にて、何失のない小兒の教ゝもなる物數奇かな。」

德右衞門の感動が――さうして其の無闇に直情的な行動が、こゝでも再び常識はづれに成つてしまつてゐた。親たるものゝ事情に委細構はず、桁をはづれた高價の人形を饋つたことは、子供を喜ばせた度合以上に、親を當惑させてしまつた。ゝ、氣が付いた德右衞門は、子供の喜びをほんこうの喜びにしてやる爲めに、その親をも救はねばならぬ羽目ゝなつた。子供を幸福にするには、如何なる高價な贈り物よりも、先づその親たるものの家庭生活を幸福にしてやらねばならぬゝ結んだゝころに、汲めゞども盡きぬ滋味があり示唆がある。

（昭和十四年四月二十一日稿）

（五五頁より）

「ぢきに又拵へてあげるよ。お前が歸つて來るのがわからなかつたからな。さあ、降りて來て乳をお飲み」

おぢいさんは下から答へた。

ハイディは降りて來て、もゝのまゝのあのなつかしい高い腰掛にかけて、お椀を取り上げ、ごくゝゝこのごを鳴らして、如何にもおいしさうにお乳を飲んだ。

「ああおいしかつた！、おぢいさん、うちのお乳は世界中で一等おいしいわね」